

## 待機寮で始まる災害活動(1995年3月号掲載・岩本 正吾)



突き上げる揺れだった。目覚まし時計を見ると6時前をさしていた。

部屋の電気を引っ張っても電気がつかない、懐中電灯を掛けている場所を覚えていたので、備えあれば憂いなしと思いながらスイッチを押した。

スピーカーと加湿器が畳の上に落ちていた。もう一度電気のひもを引っ張ってみたがやはり電気がつかなかった。

そうしていると、隣の部屋の井上さんが懐中電灯で私を照らし「生きとるか」と部屋を覗いた。「べっちょありません」と答えると「そうか!」と、戸を閉めた。

廊下が騒がしくなり、何か火事が起きているらしい。そこで同期生と一緒に屋上に上がってみた。

寮の屋上からは、長田と板宿の辺りが見渡せる。「いち、に、さん…」8カ所から火の手が上がっていた。悪い夢を見ているようだった。

すぐに、出勤する準備を始めた。パンツ、シャツ、靴下をカバンに押し込み車に乗った。まだ夜の明けぬ外は、底冷えする寒さだった。

ラジオをつけおよそ5キロほど離れた署に向かった。ラジオからは「ただいま地震がありました。各地の震度は次の通りです、西宮は・・・」それだけだった。神戸は出てこなかった。時計を見ると、6時30分ぐらいだった。

いつもなら街灯がついているところも真っ暗で気味悪い道だった。

道路に人が立っている。その横を見ると崩壊した家があった。よく見るとそこらじゅうの家や建物が潰れていた。ひどい状態だった。もうほぼ全焼しているものもある。道はよく見るといたる所に段差が出来ていた。

長田消防署に着いた。中はうす暗く、3階の事務所に上がると主幹と副署長が見えた。車両と消防係は誰もいなかった。

階段をおりていると、ステテコとシャツだけのおじさんが立っていた。「毛布をもらわれへんやろか」と泣くように言った。いつも昼御飯を消防署に出前してくれていた、おっちゃんだった。毛布はあげられなかった。今でもくやんでならない。

1階に下りると、「助けにきてくれ！家が燃えてる！早く消しに来てくれ！」と、大勢押し寄せて来ていたが、どうにもできなかった。ただ4階のホールに上がってくれというだけだった。けがをし、動

けない人が大勢床の上に横になっていたが、病院に運ぶ救急車もなく、声をかける事さえままならなかった。

スコップ、バール、ある物はみんな貸した。

18、19歳の女の子がお父さんを助けに来てくれと掛けこんできた。話を聞くと、男手さえ有れば助け出せると訴えている。俺で間に合うのであれば行ってあげたかった。勝手に出ることもできず副署長に伺った。

副署長の「救助に行ってくれ」との命令により救助に出た。役に立つかどうか分からなかったが、スコップがあったのでスコップ2本抱えてその女の子について行った。最初の現場は、菅原商店街の通りにある家だった。商店街の東側はすでに火の海と化していた。

商店街の西側の通りの路地を入った所だった。要救助者は跡形もなく潰れた家の中らしい。人間が一人、這っては入れるくらいの間隙から見えたため、外にいた人に「火が近づいたら教えてくれ」と、期待できないがとりあえず頼んでおいた。

中には近所の人が2人すでに救助活動をしていたが、思うようにいかないらしく俺が入っていくと「どうにもならへんねん、道具がないわ」と、訴えた。

中が狭いため、とりあえず2人を外へ出し、現場の状態を確認した。お尻らしき物が見えているだけで、ほかは壁と柱で埋まってどの様な状態で埋まっているのか、見当がつかなかった。

1人呼び戻し2人で掘ることにした。幸か不幸か、壁が土壁だったため、後から誰か持ってきた包丁と鋸とで、土壁の竹と縄を切りながら少しずつ壁を崩していった。「息は出来るか！」と声をかけると、「息は出来るけど頭が何かに挟まっていて、抜けない」と答えが返ってきた。しかし、上半身は、壁の下に埋まっていて、頭がどこにあるのかも確認できない。しかし、とにかく掘った。

火の勢いが不安だったため、一緒に掘っていたもう一人の人に、火災の状態を確認してきてくれと頼んだ。「火がそこまで来ている」住民が叫んでいる。外を確認するため、一旦入ってきた隙間まで行き、外を覗いた。強い風が吹き火災が迫っていた。2軒挟んだその隣の家にはもう火が入っていた。

外を度々覗きながら、掘るのを続けた。一緒にいたもう一人の人はいつのまにか、どこかへ行ってしまっていた。奥さんらしい声で、「もう、助かった？」と声がしていた。やっと背中、首が見えてきた。もう少しだと自分に言い聞かせながらも、火の勢いがとても不安でつらかった。その上余震の度に上部から土が落ちてくるため、何度潰れてくるか非常に不安であった。

さっきまで、いなくなっていたその人が、1メートルぐらいの鉄の棒を持って入ってきた。

お父さんの頭は、床と柱に挟まれ、その床が抜け、頭が床に刺さった状態だった。この1メートルの棒がちょうどこの狭い空間に合っていて、柱と床の間に差し込み柱を少しだけ持ち上げることが出来た。次の瞬間「抜けた！」と埋まっていたお父さんの口から言葉を発した、私も「やった！」と言葉が出た。奥さんが外の隙間から覗いていたのが見えたため、「誰か男3、4人つれてきて」と

頼んだ。奥さんが「お父ちゃん助かったん？」と聞いてきたので、助かったことを教えると大声で「お父ちゃんが助かった！助かった誰か手伝って」といいながら人を呼びに行った。

お父さんを運び出し、商店街の北側の方を見ると火が回っていたので JR 高架まで背負って下りた。おばあちゃんが泣きながら「ありがとう、ありがとう」とすがってきた。「よかったなあ」と声をかけた。救急車はないのでだれか車に積んで病院まで運ぶよう伝えた。何とか助けだせて本当によかった。時計を見ると 9 時前位だった。とりあえず署まで走って帰ることにしたが、途中、倒壊した建物の前の人盛りから、「おまえ消防か、消防ならこの中の人助けんかい！」と言われた。弁当屋さんようだった。取敢えず中に入ってみることにしたが、さっきの救助場所のちょうど裏側くらいに当たるため、急ぐ必要があった。

倒壊した建物に入ると強いガスの臭いがし始めた。

1 階は、潰れてきた天井と、床一面にこぼれた油、潰れたステンレスの棚でぐちゃぐちゃだった。ガスの臭いは不安として、常につきまとった。要救助者は、潰れてきた天井とステンレスのテーブルの間に挟まれていた。

救助にあたり、こぼれた油が非常に障害となった。力を入れても引っかかりができず、つるつる滑るため、力が入らないのである。30 分くらいだと思うが、私 1 人では、どうにもならない。と判断し、一旦署に戻り応援を頼む事にし、その旨を伝え、署に急いだ。

署に帰りこの救助事案の内容と応援が必要の旨を副署長に伝えた。

副署長の命により2人の応援と救助に必要な装備を救急車に積み込み再度現場に向かった。

再び中に進入し、挟まった部分があまりにも狭く、挟まった手とテーブルが、崩れた天井を支えていたため、挟まったテーブルを除去できても、天井が崩壊し落ちてくる可能性が非常に高かった。エアマイティで挟まった部分を広げれば、抜き出すことが出来るのではないかと言う事になり、私が署に行き、持ってくるよう頼まれたため署に急いだ。しかしどこを探しても機材がなく、ちょうど兼任救助隊の車両が見えたため、必要な機材を乗せ再度現場に向かった。

自分の目を疑った。現場に着くとすでにそこは、火の海だった。泣きそうになった。

救急車をそこに向けようとする道で反対側で手招きする人がおり、よく見ると、2人の職員と要救助者ともすでに脱出していた。神さまに感謝する気持ちだった。

そのまま救急車で救助した女性を病院に運んだ。

一息いれ、今度は大橋町の辺りで生き埋めがあるとの事で、体制を整え4人の隊で現場に向かった。

現場に着くと、すでに崩壊した建物には火が入っていた。

「この中に、じいさんが居るはずなんや」と言うが、呼びかけにも反応がなく倒壊の状態があまりにもひどく、生存の可能性が非常に低いと思われた。近くにクレーン車があったため、建物の角にワ

ワイヤーを掛け、持ち上げることを試みたが無惨にもワイヤーは惨めな音を立て切断した。倒壊した建物は、ピクリともせず、燃え尽きた。

駒ヶ林町で生き埋めとのことを、前の現場で言われていたため、そちらに向かった。

倒壊した建物内に3人の要救助者がいるとのことであった。呼びかけに反応するものは2人。まずこの2人から救出することにした。

1人は、外部から容易に確認できた。もう1人の方も何とか救助資器材を使用することにより救出可能であったため、二手に分かれ救出に当たった。ここもガスの臭いが強くエンジンカッターなど使用不可能なため金鋸等で切っていたが、間に合わない。一旦署に帰りエアソー等を運んできて対処、無事2名を救出した。しかし、残った1人は居場所の見当もつかず、呼びかけに対しても反応なし。約1時間程度捜索を続けたが、発見できず次の現場に向かった。午後の1時頃だった。

久保町で生き埋め。倒壊家屋の中で足を挟まれ出られなくなっていた。

3時間を費やした。上下は布団であったため、その綿をちよつとずつとって隙間を作り引っ張り出した。既に、夕方になっていた。

署に帰った。おにぎりをほおぼり、一息つく間もなく他都市応援隊の車両に、緊急の燃料補給の仕事が待っていた。それを1時間程度したくらいであろうか、荻藻通2丁目の共同住宅で生き埋め

とのことで、桑名消防の専任救助隊の方と2名で現場に向かった。(他の隊員は西市民病院の救助活動にいていた)

現場には警察官、消防団、重機の運転手など10人程度の人が待っていた。

現場を確認したところ1人は確認できた。エアマイティ、スーパーカッター等を使用し救助に当たった。やっと1人を無事救出することができた。

この建物に、他に何名か要救助者が居るとの事であったが、呼びかけにも応答がなく、2名では対応しきれないと判断し、一度署に帰り他隊に引き継いだ。

署に帰るとすでに0時を回っていた。救急の燃料補給の仕事は昼夜を問わず行われ、日を増すごとに応援隊の車両は増えていった。長田区だけでも200台以上の他都市応援隊の車両が活動。燃料の消費量も短時間ですさまじいものとなった。

消火・救助活動と燃料補給。この災害活動に終わりはないのだろうか。